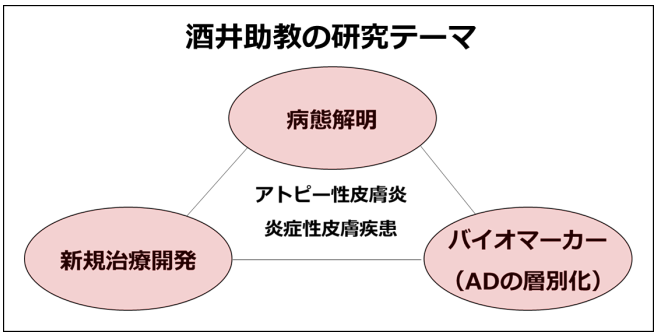
酒井貴史助教の研究紹介



酒井貴史助教は、主にアトピー性皮膚炎を対象とした基礎研究、臨床研究を行っています。アトピー性皮膚炎は全人口の20%近くが一生のうち一度はかかると言われています。疾患に苦しむ非常に多くの患者さんが存在する一方で、未だアトピー性皮膚炎の病態には不明な点が多く、患者さんの治療に難渋する事が少なくありません。酒井貴史助教がこれまで行ってきた主な研究テーマは、**「アトピー性皮膚炎の病態解明」、「アトピー性皮膚炎の新規治療開発」、「バイオマーカー（疾患の重症度や予後などを予測出来る生体因子）の探索」**であり、同領域における多くの知見を積み重ねてきました。近年公開された、最新の研究成果を簡単にご紹介いたします。

１：皮膚のセラミドの性状がアトピー性皮膚炎の再発を予測する

アトピー性皮膚炎は容易に再発を繰り返すため、治療の調整が大変難しい疾患です。酒井助教らのグループは、アトピー性皮膚炎患者さんの皮膚のセラミドを調査し、そのセラミドの性状が皮膚炎の再発を予測しうることを発見しました。患者さんの皮膚セラミドの情報を利用することで、より簡便なアトピー性皮膚炎治療が可能となります。

(Sho Y and Sakai T, et al. *J Invest Dermatol* 142(12) 3184-3191.e7, 2022)

２：アトピー性皮膚炎患者の血液中で多くの脂質濃度が変動している

アトピー性皮膚炎患者さんの皮膚では、数多くの脂質（セラミドなど）研究が行われていますが、血液中の脂質についてはほとんど情報がありませんでした。酒井助教らのグループは、アトピー性皮膚炎患者さんの、血液中の様々な脂質濃度を調査し、複数の脂質において、その濃度が変動していることを見出しました。さらにその一部は、アトピー性皮膚炎の重症度と関連があり、本研究はアトピー性皮膚皮膚炎の病態に新たな視座を提供します。

(Sakai T, et al. *Allergy* 76(8):2592-2595, 2021)

(Sakai T, et al. *JID Innov* 22;2(2):100092, 2022)

３：血液中の RANKL 濃度が、アトピー性皮膚炎患者の骨折リスクを予測する可能性

近年、アトピー性皮膚炎患者さんでは、骨折のリスクが上昇することが明らかとなりましたが、その機序はよく分かっていません。酒井助教らのグループは、アトピー性皮膚炎患者さんの血液中において、骨と関連の深い RANKL という分子の濃度を調査し、同濃度が、アトピー性皮膚炎患者さんの骨折リスクを予測する可能性を見出しました。本研究はアトピー性皮膚炎の合併症における新たな予防戦略の可能性を提唱します。

(Sakai T, et al. *Allergy* 76(10):3220-3223, 2021)

注：いずれもまだ研究段階の成果であり、臨床応用は出来ません